



令和2年度3職能生きる力を育むいのちの教育検討委員会

高知県の子どもたちが、自分のいのちを肯定的に受けとめ、生きるための力を育み力強く生きていくことを看護職が支えていきたいと考え、3職能合同で特別委員会を発足しました。

その第1回目を令和2年8月8日(土)に、第2回目を令和2年9月19日(土)に開催しました。その中で、保健師、助産師、看護師の立場から、また、現在携わっている職務(直接子ども達にかかわってなくても父母、祖父母、家族、関係者等)から、それぞれ、いのちに寄り添い働いてきたからこそ伝えられることがたくさんあるということをあらためて確信しました。

“生きる力”は、狭義の性教育だけではなく、子ども達一人一人が、発達に応じて、自分を大事にし、相手を思いやることができる、周囲を守ることのできる、対処できる力(coping)...、“生きる力”を育むことを目指し、それぞれの立場で、伝えられること、かかわることができる機会をとらえ、看護職としての役割を活かしていくことを再確認しました。

保健師として、地域、医療機関、職域等での現場においても、また世代問わず、個・家族・集団・地域と丸ごととらえ、いのちに向き合う私たち。

このコロナ渦においては、自分自身を守ることについて、より一層考えさせられている今、ますます、“生きる力”を育むことの重要性を感じています。

実際にいのちの教育を3職能が実践していくことができる研修会を企画しました。是非ご参加ください。



看護協会 入会のご案内

高知県看護協会は、日本看護協会との連携のもと、保健師・助産師・看護師の看護の質の向上を目指し、活動しています。

また、安心して働き続ける環境づくりの推進・次世代の人材育成にも取り組んでいます。

詳しくは、お近くの職能委員へお声掛けください。

高知県看護協会

TEL088-844-0678
 ※入会すれば、日本看護協会との同時入会となります。

「生きる力を育むいのちの教育」基礎編・実践編

日時:令和2年11月15日(日)9:30~16:30

場所:高知県看護協会

講師:東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科教授 渡會 睦子先生

対象者:保健師・助産師・看護師

【基礎編】 9:30~12:30

- 3職能が「生きる力を育むいのちの教育」を理解する
- 学校現場での性教育の今を知る(教育現場の先生の声を聴く)

【実践編】 13:30~16:30

- 3職能の役割・立ち位置を明確にする
- 学校保健計画のどの部分を看護職が担えるか検討してみよう
- 学校現場との協働について計画する

次回予定:令和3年1月24日(日)【まとめ編】



新型コロナウイルス感染症体験談～対応した保健師の記録～



新型コロナウイルスの電話相談に携わって

新型コロナウイルス健康相談センター 保健師

新型コロナ感染症で、今、世界中が大変な状況になっています。

高知県でも高知市と一緒に2月から新型コロナウイルス健康相談センターを立ちあげて、日々の相談を受けています。私も当初から相談員をさせていただいて、8か月になりました。県担当課の方が、9時～21時までをほぼ3交替になるように相談員担当表を作ってくれていますので、相談対応にあたるのは、時々ですが、県民、市民、時には、県外の方からいろいろな相談やご意見、質問などがあります。

もっとも一番多いのは、自分やご家族の体調の心配や、受診について、また、コロナ感染症という未知の感染症への不安などですが、現在は、関係の方々の力で、多くのことがわかってきています。そして、自分たちが、何に気をつけてどのように、生活すれば良いかということが明らかになり、随分と不安・心配が軽減されたと思います。

現職の時、別の感染症の集団感染があり、対応したことは忘れられません。

感染を受けた当事者やご家族、関係の方々はどうなにか大変だったろうと、今のコロナの状況を見て、さらに強く思ったことです。

感染症は、感染源、感染ルートがあり、感染するという、あたり前ですが、これで感染が広がっていきませんが、その対応は、池に石を投げた時、水面に広がっていく輪のように、必要なことを過不足なく対応するという基本的な方針で、情報を共有しながら対応をすすめていました。

今も現場の方々は新しい感染症への対応でご苦労されていることと思います。

いつ誰が出会うかわからない感染症ですが、「大変だったね。」「がんばったね。」とお互いを思いあえる社会であってほしいと思っています。

新型コロナウイルス感染症への対応から

幡多福祉保健所 保健師

県内初の感染者が確認されてから約1ヶ月後の3月31日に、管内において初の感染確認がありました。

その後、管内では、4月22日までの期間に20名の陽性患者が確認されました。その数は、現在(令和2年9月)も、高知市保健所を除く県内の5福祉保健所の中で最も多い患者数となっています。当時は現在よりも退院基準が厳しかったため、4月中旬頃になると、管内の感染症病床も逼迫する状況となりましたが、4月22日以降は、7月の1例を除き、管内での発生はなく現在に至っています。

所内では、国内での新型コロナウイルス感染症発生を受け、1月下旬頃から勉強会を開催し、管内発生時の所内体制も検討していました。そのような中、PCR検査陽性確認の第1報を受け、「患者等の情報保護」を考慮し、感染症担当チームを中心に入院調整や積極的疫学調査を開始しました。

翌日には、管内での新型コロナウイルス感染症患者のニュースは大きく報じられ、地域住民の不安感も増大したことなどから、市町村や住民からの問い合わせや電話相談などが急増しました。その他にも医療機関からの検査に関する問い合わせや、救急隊からの発熱患者の搬送方法に関する問い合わせ、飲食店や事業所からは感染防止に関することなど、様々な機関からの問い合わせが入るようになり、対応に追われるようになりました。

その頃、高知県健康政策部から、新型コロナウイルス感染症対応業務を最優先とする方針が明示され、所内でもBCP(業務継続計画)に基づき、職員全員がチームとして動けるように体制を整え、スタッフ不足に対しては、本庁から適宜人的な支援もありました。

所内全体で情報を共有しチームで動くために、所長席の前に8枚のホワイトボードを設置し、入院患者の概要や他機関との調整、連絡窓口、資材の在庫状況、当日のTODOリスト(濃厚接触者等の疫学調査、PCR検査予定、新規検体の回収予定)など様々な情報を記載し、職員誰もがそのボードを見ることで、現状や当日の動きが把握できるようにしました。また、毎日チーフ以上を対象とした朝・夕のミーティングも行い、これら一連の体制整備により、業務の確実な遂行や外部からの様々な問い合わせに所内で適切な対応ができるようになりました。「日頃できていないことは、災害時にはできない。」という、災害訓練の教訓やノウハウが感染症業務にも活かされました。

管内市町村長や市町村保健師からは、「福祉保健所のコロナ対応業務を何か手伝えないか」と、たびたび声をかけていただきました。そして市町村保健師は、住民に最も近い公衆衛生の要として、地域の感染状況や地域性を考慮し、市町村独自のメディア(広報、防災行政無線、ケーブルテレビ、広報車など)を活用して「人権にも配慮した感染予防の普及啓発」をタイムリーに実施し、外出自粛等によるフレイルの予防や、休校になった子ども達に向けてのラジオ体操放送の実施など、現在も様々な取り組みを実施しています。

現在、高知県では、今後の感染拡大や季節性インフルエンザとの同時発生に備えて、新たな検査体制整備や地域の医療体制確保に向けた宿泊療養施設整備に取り組んでいます。

今回の感染症対応の一連の取り組みは、市町村や幡多医師会をはじめとした医療機関、様々な事業所等と、これまで以上に顔の見える関係を作る機会となりました。今後もこのネットワークを通じ、管内の様々な機関が一丸となって、新型コロナウイルス感染症に対応できるのではないかと期待をしています。



新型コロナウイルスは、日々変化しながら半年以上経ってもその存在感を放ち、私たちはマスク姿の「新しい生活様式」に馴染む行動が求められています。高知県では、2月の早い段階で、高知市と合同で「新型コロナウイルス健康相談センター(以下、センター)」が設置されました。私もその一員として「相談の声」に向き合ってきました。

電話相談は、保健師、看護師等で担当し、9時から21時までを3交代体制で行っており、感染状況や相談件数により、電話の多い時期は、1シフト5～6名で、比較的落ち着いた時期は、2～3名で運営しています。県担当課や他の相談員に相談しながら業務に当たることができ不安や緊張感も和らぎます。

相談の流れは、医師が診察の上検査が必要と判断した場合、センターに連絡があり、センターから各保健所に連絡して対象者の状況を伝え、各(福祉)保健所と医療機関で再度検査等の具体的な調整、指導が行われます。

2月、3月当初は、まず武漢等海外渡航状況の把握から始まり、インフルエンザや風邪の時期とも重なり、発熱、咳、喉の痛み、鼻汁等の症状についての相談が多く受診の助言等行いました。

全国的に拡大してくるとコロナではないかとの不安に加え、受診できるか、他の人にうつすのではないかと、検査をしてもらいたい、どこで検査できるか、陰性の証明がないと仕事に行けないなどの相談が多くなりました。受診に際しては病院に電話をして確認しマスクをつけて行くよう助言しましたが、受け入れ困難な医療機関もあり、つらい状況もありました。夜間休日は、救急医療情報センターを紹介しました。怒りや不満の声、うわさの暴走、誹謗中傷等に、理解の難しさを感じました。これまでの歴史でも同じようなことがあったことを思い、改めて自分の心のありようも考えさせられました。

9月中旬から検査協力医療機関が増え検査体制も充実してきました。各(福祉)保健所には、忙しい中でも連絡した際快く丁寧に応じてもらいスムーズにつながることができました。

電話相談業務に携わって、大切だと思うことをあげてみると、①困っていること、不安なこと、知りたいことをできるだけ丁寧に、正確に聞く。→日々の新型コロナウイルス情報を把握する。今の時点でわかっていることを伝える。②不安な気持ち、不満や怒りを受け止める。→不安、怖い気持ちはおかしいことではない。誰もが持つことだと伝える。③混乱している場合は、相談内容の整理を助け、説明する。→「あなたの心配なこと、知りたいことは、〇〇ということですね。」④基本的に有効な予防策は「3密(密集、密接、密閉)を避ける」ことを伝える。→日頃からマスク、手洗い、消毒を励行する。と、いうようなことですが、「保健師の活動」を改めて感じました。普段の活動に新しい知識や情報を取り入れ、正確な判断力、聞く(聴く)、伝えるという技術を重ねていくことが大事だと思います。

新型コロナウイルス感染症の対応から



令和2年2月28日、高知県第1例目の感染者が高知市で発見されました。その後、数珠繋がり次々と陽性者が確認されていく中で、担当課のキャパシティを超える業務量の増大と、怒涛のように押し寄せる市民の不安や健康相談の前に、現場は混乱し疲弊していました。それでも容赦なく、新たな感染者の発見は止まらず、月の残業時間は100時間を超えていました。

その頃、第一線で対応している保健師が、マスコミの取材の最中に感染者やご家族の言葉を思い出し、思わず涙ぐむことがありました。住民に寄り添い続ける姿勢や対応に、横で話を聴いていて目頭が熱くなるのが何度もありました。PPEを装着して患者さんを搬送することもあり、日々使命感と緊張感の連続でした。一方、当事者の方の中には「自殺した」というデマが数カ月にもわたりネットで投稿拡散されるなど、人権的な課題も生じていました。

あれから、8カ月の月日が流れようとしています。これまでの活動を振り返ると、まさに災害対応そのものでした。指揮命令と役割の確認から始まり、情報収集・情報分析・対応検討、受援体制の構築等…どこかが滞るとうまく回らないので、その都度、工夫をしながら進めていきました。現場では、特にホワイトボードを活用したカテゴリ毎の情報の見える化や、クラスター発生時の関連図、様々な資源の見える化はとても役に立ちました。また、情報の一元化という点では、台帳をアクセス管理し、帳票にも活用できるシステムを作るなど、事務職の力を借りながら整えていきました。

人的応援体制については、保健師をはじめいろいろな職員から「何かできることがあれば」と声をかけてくれたことが何よりの力になりました。当初は、まずは主管課で課内職員を総動員して対応、難しくなれば保健所全体あるいは全庁的な調整へと展開していきました。保健師については、新型コロナウイルス健康相談センターへの出務や、1週間サイクルでの現場応援の調整が必要となり、途中から人事課のサポートが得られ、その延長線上で、保健師2名と事務職1名の兼務辞令(期限付)につながりました。紆余曲折ありながら、現在は感染症発生レベルに応じて、マンパワーが稼働するように体制整備をしています。取りも直さず、多課からのサポートは受援そのもので、平時からの体系的な人材育成の必要性を痛感しているところです。

また、市の体制としては、1月末に保健所長をトップとした健康危機管理調整会議を設置し、4月には市長を本部長とした新型インフルエンザ等対策本部員会議に移行しました。刻一刻と変化する対応施策にアンテナを張りながら全体像を捉えていくことの大切さを実感しています。特に、課題解決に向けての施策展開が急に飛び込んでくる場面が多く、予算的な措置を含め行政職員としての力量も問われます。

新型コロナウイルス感染症は依然と猛威を奮っていますが、ワクチン接種の検討が具体的に始まるなど、新たな局面にさしかかろうとしています。新型コロナウイルスは、健康危機対応のあらゆる局面を私達につきつけ、図らずも、公衆衛生活動の原点を再認識させてくれているように思います。

2020こうち看護フェア開催

令和2年8月9日(土)、10日(日)に午前と午後の2部構成で、延期をしていました「こうち看護フェア」が、高知県看護協会で開催されました。完全予約制のなか多数の参加希望をいただき、急遽2日間開催することになりました。

看護職をめざす高校生や社会人の方々に、看護体験をしていただいたり、先輩看護師の語りをおとして看護職の魅力等をお伝えする機会となりました。看護職をめざす高校生、30校238名と昨年より50名も多くの方々に参加いただき、保健師の先輩による語りや手洗い効果の確認コーナーも大変好評でした。

主な内容 看護協会長挨拶、先輩看護職による語り、看護体験、進路相談会など



先輩保健師の語り & 個別相談

今年も高知市の保健師西田ゆいさんが、2日間に渡ってご担当くださいました。保健師を目指した理由や、仕事の内容、日頃から大切にしている思いなどを語っていただきました。個別相談では、保健師のやりがいや自治体ごとの保健師活動の特徴、採用試験、国家試験対策など沢山の相談をいただきました。(相談者54名)

保健師活動の写真展示&体験コーナー

写真展示では保健師活動の紹介を行いました。手洗いチェッカーによる、洗い残しの評価を確認しながら、手洗いの仕方を振り返る機会となりました。158名の高校生が体験を行いました。

今年はフローレンス・ナイチンゲール生誕200年です。看護職への関心を深め、地位を向上することを目的に世界的なキャンペーンがされています。



©1976, 2020 SANRIO CO., LTD. APPROVAL NO. G082012



～編集後記～

新型コロナウイルスが猛威を振り始めて8か月が経過し、この間に私たちは新しい生活様式を習慣にして暮らすことがあたりまえとなってきました。乳幼児健康診査や特定健康診査をはじめ様々な保健事業の会場の様子は以前とは違った風景となっています。

地域を見てみると、いきいき百歳体操をはじめ高齢者の集いは、新型コロナウイルス感染症の様子を見ながらおそるおそる始まっています。地域の元気がなくなっている、人と人のつながりをここで終わらせたくないというお世話人さんの思いを支援者の一人として支えていきたいそんなことを思っています。